村のくらし

貴方に伝えたいことば

Hyunckel & Maam

貴方に伝えたいことば

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18661919

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後, ヒュンマ恋文集2022

結婚後のヒュンマ。ネイル村くらし１年目秋ころの話。
「天使のおくりもの」novel/16399242の少しあとのお話。

2022.10.22開催ヒュンマオンリーwebイベント「ヒュンマフェスリラン」企画「ヒュンマ恋文集」参加作品です。
ヒュンマ恋文集のアンケート⑥11「もし、過去に戻れるとしたら、いつに戻ってどうしたい？」14「もし、お父さんに言葉を伝えるなら、何を伝えたい？」の台詞をいただきました。
2022.10.29　Twitterにて公開。

Table of Contents

貴方に伝えたいことば

　1日の終わりには、マァムは寝室で本を読んでいることが多かった。
　この日も、マァムは、ベッドの上に座って、膝の上に本を広げていた。ヒュンケルもまた、寝室の端に置かれた椅子に腰かけ、読みかけのロモス史のページをめくっていた。
　ふと、マァムが、乱暴に、腕で自分の目元をぬぐった。
　見ると、彼女の目元が少し赤くなっていた。
　マァムは、照れたような笑顔を彼に向けると、困ったように眉を下げた。
　ヒュンケルは、マァムに尋ねた。
「悲しい話を読んでいたのか？」
　すると、マァムは首を横に振った。意外な言葉を口にした。
「ううん。
　・・・幸せな話よ。」
「そうか。」
「でも・・・そうね、確かに私には悲しかった・・・。」
　そう言って、マァムは寂しそうに笑った。
　ヒュンケルは尋ねた。
「どんな話だったんだ？」
　すると、マァムは、ゆっくりと、語り始めた。
　少しずつ、マァムの言葉が染みわたるように広がっていった。それは、彼女自身が物語りを紡いでいるようでもあった。
「あのね、時間を過去にさかのぼるの。
　主人公がね、亡くなったおばあちゃんに会いに行くお話。
　おばあちゃんは、主人公が子どものころに亡くなっていてね、でも、その人は、おばあちゃんが大好きで・・・大人になった姿をおばあちゃんに見せに行くのよ。
　おばあちゃんは、その人が子どものころの姿しか知らないのに、すぐに分かってくれて、『大きくなったね』って言ってくれるの。
　だから、幸せな話なのに・・・私には、悲しかったの。」

ヒュンケルは黙って、マァムの言葉を聞いていた。マァムがなぜ、その過去にさかのぼる話に悲しみを覚えたのか、ヒュンケルにも察しがついていた。
「・・・私ね、ヒュンケル、子どもの頃から、小さい頃に戻れたらって思ったこと、何度もあったわ。
　・・・父さんに、会いたかったの。
　会って、話をしたいって何度も思ったの。
　私は元気よ、大きくなったでしょう？って、父さんに今の私を見せたかったの。
　何度も、そう言いたいって、何度も、父さんに会いたいって・・・思ってた。
　でも、もちろん、叶わなかった。
　だから、こういうお話を見ると、いいな、私も同じ事が出来たらって思っちゃうの。」
　マァムは、視線を上げると苦笑した。
「私らしくないわね。」
　だが、ヒュンケルは、首を横に振った。
「そんなことはない。
　それだけ、お前がロカさんを大事に思っているということなんだろう。」
「ありがとう、ヒュンケル。」
　慈しむようなヒュンケルの言葉に、マァムは安らいだ。
　マァムは、絵本に視線を落とした。そして、その本の面を右手で撫でながら、ぽつりぽつりとつぶやいた。その目には、涙が溜まっていた。
「・・・父さんが、大好きだったの。だから、もう一度会いたいって・・・。」
　このときのマァムは、ひどく感傷的だった。だから、配慮が足りなかったのだと、マァムは後になって思った。
　マァムは、感情に押流されるまま、ヒュンケルに尋ねた。
「ヒュンケルも、私みたいに思うことある？
　過去に戻れるなら、戻りたいと思う？
　もし、過去に戻れるとしたら、いつに戻ってどうしたい？」

そこまで言うと、マァムははっと顔色を変えた。右手を口元に当てる。
「あっ・・・。」
　彼女の前では、ヒュンケルが、困ったような笑みを浮かべていた。
　過酷な半生を送ってきたヒュンケルにとって、戻ってやり直したい過去は、無数にあってもおかしくなかった。それを聞くこと自体、残酷だとマァムは思った。
　マァムは、申し訳なさそうにうつむいた。
「・・・ごめんなさい、私、無神経だったわ。」
　だが、ヒュンケルはかぶりを振った。
「そんなことはない。気にしなくていい。」
　そうして、ベッドの縁に腰かけると、マァムの頭を撫でた。
　ヒュンケルは、少しずつ、言葉を紡いだ。
「俺も、父に会いたいと思う。
　もう一度、父に会えたのなら、話したいことはたくさんあるな、と思う。」
　ヒュンケルは、そこでいったん言葉を区切った。
　そして、はっきりとした口調で、答えた。
「だが、過去に戻りたいとは思わない。」
　ヒュンケルは、そのまま言葉をつづけた。
「俺の過去は、間違いだらけだった。
　戻ってやり直せたら、と思ったこともあったさ。
　あのときに戻れたら、この結果を防げたのに、と思ったこともあった。
　だが、いまになると思う。
　どんな過去も、俺が背負っていかなければならないものだ。戻ってやり直したいと思うこと自体、俺が手にかけた人々への冒涜だとな。」
　あまりにも自分に厳しい物言いに、マァムは反射的に首を横に振った。
「・・・そんなこと。」
　だが、ヒュンケルは、いつになく穏やかな笑みを浮かべると、

マァムの肩に腕を回した。そのまま、抱き寄せる。
「心配するな、悲観しているわけではない。
　それだけじゃないんだ。俺が過去に戻りたいとは思わないのは、それだけが理由じゃない。」
「・・・じゃあ？」
　腕の中から自分を見上げるマァムを、ヒュンケルは愛おしそうに見つめた。
「どんな経験も、すべて、いまの俺を形作っている。
　何一つ欠けても、いまここにたどり着かないんだ。」
　そうして、ヒュンケルは、マァムを見つめたまま、呟いた。
「マァム、俺は、いまが一番幸せだ。
　だから、どこの時点であっても、過去に戻りたいとは、思わない。」
　まっすぐな彼の視線を受け、マァムの瞳の中で、先ほどとは違う涙が視界を曇らせた。
　マァムは、ヒュンケルの胸元に額を寄せ、彼の背に腕を回した。
「ヒュンケル・・・。
　ありがとう。」
　ヒュンケルもまた、愛おしそうに、マァムの髪を撫で、呟いた。
「ただ、確かに、父には会いたいな。」
　すると、マァムは、ヒュンケルの胸元に頬を寄せたまま、上目遣いに彼を見上げた。
「じゃあ、ヒュンケル。
　もし、お父さんに言葉を伝えるなら、何を伝えたい。」
　ヒュンケルは、腕の中の新妻に、穏やかに微笑みかけた。
　ひとこと、かみしめるように、ゆっくりと言葉を紡いだ。
「今、幸せです、と。
　それだけ伝えられれば、十分だ。」